赤い世界　－ＫＩＮＧ　of　ＢＬＡＣＫ－

アマゾン滝沼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
赤い世界　―ＫＩＮＧ　ｏｆ　ＢＬＡＣＫ―

【Ｎコード】
Ｎ３４１７Ｍ

【作者名】
アマゾン滝沼

【あらすじ】
赤色の世界。
そこに“在る”全ての物は黒であり、この２色以外は存在しない。
千葉県某所。
少し前から。街に噂される（ささやかに）、奇怪。
それは、健康だった人間が数日の内に意識不明の重態となる奇異。
それに留まらず、あきらかなる“異常”が色の多い世界に溢れて

いる。

真相は、“赤と黒”――――――ここに、ある。

黒のスフィンクス　（1）（前書き）

＞i9245―1289＜

前作があります。タイトルがとっても似ています。
ですが、それを読んでいなくても現時点で何の問題もありません。

連続物ですが、読んでいただけたら誠にありがたいです。
それでは――――――　←

黒のスフィンクス　（1）

私の持つあらゆる感覚。

鼻で感じる香り。
耳で感じる音。
舌で感じる味。
肌に刺すような痛み、肌をなでるような痒(かゆ)み。

そして、無限の色彩を脳に写す瞳(ひとみ)――――――。

今まで信じてきたそれらは正直で、いつわってくれない。
どれだけ私が顔を伏せても、どれほど私が膝を抱えても。
決して、「本当」を伝えることをやめてはくれない……。
「容赦が無いなぁ――」なんて言っても、やめてはくれない。

この、赤く、無数の黒が交錯する世界で――――私の五感はいつでも正しい。

赤い世界

― ＫＩＮＧ　ｏｆ　ＢＬＡＣＫ ―

◇黒のスフィンクス◇　其の１

ｓ１

南条市（なんじょうし）。千葉県のちょうど中央に位置するこの町は、若干に寂れている。

毎朝巻き起こる通勤のラッシュは一貫して東京方面で。向こうからここに来る道はアスファルトも線路も等しくからっから。

四月も始め。

そこそこな都市の外れ位置。高級住宅が多い高台の上。そこの一軒。

少女は弾むような気持ちを抑えながら、新たな服の袖に腕を通し

ていた。
今時、セーラーは少数派なのか。特に田舎の街中ではブレザーが多い。
少女の新たな服もブレザーで。彼女がそれのボタンを留め終わると、緑色のリボンが胸元で揺れた。

階段を駆け下りて食卓へ。広いリビングでは父と母がＴＶで流れているニュースを見つつ、談笑している。
『今日のラッキーアイテムは……』
などと表示される占いの結果を見て。
母は「あなた。私、水色のかばん持ってないわ。どうしましょうか」と言い、父は「遠まわしに購入を示唆しないでくれたまえ」と苦笑いを浮かべた。
「おはよう」
ブレザーの少女が微笑みつつ挨拶した。
落ち着いた声色。中学校を卒業したばかりとは思えない印象。
「おはよう……んまぁ、なんてこと！　制服がすごく似合っているわ。かわいいっ！」
母は娘の学生服姿に喚起し、手を擦り合わせた。
「おわわ、大変だ！　早くカメラ、カメラ……」
父は慌ててカメラを探している。
「お父さん。写真は入学式の日にさんざん撮ったでしょ」
「いやいや。足りない、足りない」
娘の呆れた声も気にせず、父はいそいそと自慢のデジタルカメラを手にした。
「そうね、いくら撮っても足りないわね！」
「お母さんまで……」
目を輝かせている母の表情に思わず娘の顔も弛(ゆる)む。
「はい、ポーズ！　撮るよ、いいね！」
朝の、時間も無いってのに。父はパジャマのまま無邪気(むじゃき)にカメラ

を構えた。
「もうっ。着替えないと仕事遅れるよ？」
ブレザー娘はカメラなど気にせず、食事を始める。
実際、早めに起きる彼女にはまだ時間的余裕があるのだが。
「……おっ？」
カメラを構えていた父の体が少し傾く。母も娘も、大して気にはならない程度の傾き。
二重になる視界を振り払い、父はいつものように「気は心、気は心……」と心中で唱える。
時間も無い事。父はパジャマ姿のまま、無邪気に大切な娘の姿を焼き付けていた――――。

いつもの景色。いつもの中で、靴を履く。
「いってきます」と母にいつもの言葉を贈って。外に出る。
空は晴れていて、綺麗なブルー。
アスファルトに生えた健気なグリーン。
そよ風に流され、視界を掠める一枚のピンク。
視線を上げる。流れてきた色を追って、視線を傾け、見上げる。
高台に咲く、薄い白色が入った桜の色。それは私の心に沈殿した黒を忘れさせてくれた。

しかし、犬の声。

突如響いたのは……やっぱり、小馬鹿にしたようなあいつの声。
「やぁやぁ、嬢ちゃん。元気だったかな」
四足で歩きながら、器用にも煙草をくわえているこいつ。

そして、私の声。

振り返りつつ、私は小さく言ったの。
「また、死にたい？」
全てから感じる生臭さに嫌気を覚えながら。自分もそうなのだと苛立って。

高台に揺れる黒の塊は、無数の黒線の集合。私の心に浮き上がる泥土のような漆黒。

色なんて無い。そんな“数え方”いらない。

赤か、黒か。それしかないんだから、それ以外の“表現”なんて鬱陶しい。

それは、この赤い世界でこそ当たり前。

“完全な黒で造られた私”は目の前に在る完全な黒で造られた犬を見下すの。
「あらあら、嬢ちゃん、俺を歓迎してくれないんか。泣けるぜ」
残念そうな言葉を吐きつつ、全然悲しそうじゃない。笑っている。だから、嫌い。

私はこんな朝早くからこの世界に呼ばれたこと、それが我慢できなかった。

世界を形作るのは、赤。
存在あるものは、黒。

二択の空。単純で、シンプルに腹の立つ赤の空中を流れてきた一枚の黒。
それは私の髪に触れて、砕け散った。

威嚇するブレザーの少女に、薄い黒の線を吐き出しながら語り始める犬の黒。

彼の語りが終わった頃。
少し離れた、高速で移動している黒いボックスの中。
近頃無理を隠していた人型の黒い線が、パタリと――赤の世界に倒れてしまった……。

――

つづく。

黒のスフィンクス　（1）（後書き）

読んでいただき、誠にありがとう御座います。

次回にも目を通していただけたら、至極幸いです。どうか、何卒よろしくお願いいたします。

黒のスフィンクス　（2）（前書き）

第二話です。よろしくお願いいたします←

黒のスフィンクス　（2）

七月。期末も近づき、いよいよ夏の長期休暇が迫ってきた。

「良一君っ、私を置いていかないでよぉ～」

俺の成績はすでにぼろぼろで……これからも、回復は難しいだろう。

「んもぅっ、最近冷たいぞっ☆　そんなんだと私、に・げ・ちゃ・う・ぞ／／／」

視界が揺れる、やめなさい。

――とにかく、今はどうでもいい。学業なんて、知らない。

きっと姉さんには投げられるだろうが、どうでもいい。それどころではないから。

「うははっ、無視か！　いいだろう、いい度胸だ！！　ならばこいつを――――くらえっ！」

だからやめろよ！

……彼女はああ言ったが、やはり、弥生（やよい）があのままでは、とても――――

「――――って、うぉい！　いいかげんにしろ、恭平（きょうへい）！」

だめだ、さすがにアームロックで脇の臭いを嗅がされてはガマンできない。ギシリ、と俺の顎（あご）を腕で締め付けてくる、高田恭平（たかだきょうへい）。

俺は隣のアホ面（やたらと良い笑顔）を怒鳴りつけた。

「アア……やっとこちらを向いてくれたね。さて、今日はちょっと私とでぃと（デート）してもらうぞ、良一少年！」
何勝手を言ってやがる。俺は寄り道なんてしている暇は――――
「まずはケンタ、な！　ケンタでカーネルと握手しよう、な！」
相変わらずの腕力。ロックが外せない・・・・・・。つか、別に握手したくねぇし。
恭平は俺を小脇に抱えたまま、校門を右に曲がっていく。違う、俺は逆だ！！
「やめろって、おい！」
「うはは、ダメだ、逃がさん。君が最近冷たいから、お兄さんドキドキしちゃってね。今日はたっぷりと親睦を深めようではないか、マイ・バディ！」
その、嫌に穏やかな笑顔をやめろ。

まったく、コイツは……。
俺の不安も、悩みも知らず――――暢気（のんき）なものだ――――。

赤い世界

―　ＫＩＮＧ　ｏｆ　ＢＬＡＣＫ　―

◇黒のスフィンクス◇　其の二

ｓ１

そこは、相も変わらず不気味で酷く臭う世界。
あれから3ヶ月。変化があったとすれば、せいぜい視界から見える景色に細かい黒の線が増えたこと。そして、近くに見れば蠢く黒の体に、違和感を覚えなくなったこと――――くらいか。肝心の事柄は変わらない。

一面の赤。完全な赤に黒の真っ直ぐな枠線が無数に見える。
地も、天も漆黒に。天は己の五体に等しく、されど轟々（ごうごう）と。流れるように動いている。

ゴミ袋に手を突っ込み、引っこ抜く――そんな単純な動作と同じ挙動。
「アアア、嗚呼……」
6つ腕の黒い塊は、耳に触る呻きを残して塵となり、赤の空に消えた。
「……」
それを見つめる赤い眼光。
人の形をした完全なる黒。
彼は、消えた黒い塊に少しの哀れを感じつつ、振り向いた。
「スムーズね。爽快なほどに」
振り向いた黒い彼を見つめる、これも赤い妖艶な眼光。
それも人の形をしており、これをシルエットと捉えるなら“髪の長い少女”だと解かる。
「……嬉しくないね」
哀れを振り切るように首を振った人の黒。
秋山良一は溜息混じりに返答した。
「どうしてよ。あなたは確実に“この赤い世界”に慣れてきている――良いことだわ」

少女の黒は。黒い枠に腰掛けて、足をふらふらと揺らしている。
「俺は彼に――いや、彼だったコレに恨みはない。俺が消したいのは、この人たちじゃない……」
良一は俯き、額を掻く。
「……ダメね、まだ“人”なんて言ってる。だから、死んでしまった者にいくら同情しても仕方ないじゃない」
少女の黒は当たり前を言うように笑い、呆れた。
「覚悟、したんでしょう？　言ったじゃない。この世界で“戦う”って――きっと、助けるって」
「……」
彼女の当然ながらも厳しい指摘。良一は黙るしかない。
「それに、まだ不十分よ。あなたはまだ、この“赤”に慣れる必要がある――」
「慣れるって。もう、十分に――」
少女の言葉を遮った良一の言葉。それが“割れる巨大なガラスの音”――のような高音に遮られた。

少女の腰掛けていた黒の線は破裂し、無数の黒灰が赤を舞う。
「だって、弱いもの。あなた」
穏やかながらも可愛らしい声。そして、全てを見透かし、虐待するかのような二色の表情。
「……」
赤い眼を細めて。良一は彼女から気まずそうに視線を逸らした――――。

南条市(なんじょうし)の外れにある薄汚れたアパート。外壁ぼろぼろ、手すりはサビサビ。階段も、ドアもサビサビ。それが柴田荘(しばたそう)。
まぁ、しかし。それもこの赤い世界では無数の黒い線の集合でしかないのだが……。

“ベランダの赤”に降り立つ二つの黒塊。それは俺と、女性の姿。
「それじゃ、また明日ね。秋山君」
「……」
「何よ、変に黙って」
もう、何日こうして過ごしたのだろうか。こうしている今も、弥生は――
「また悩んでいるの？　焦(あせ)っているの？」
「……」
「言ったでしょ、この世界の事なんて医者は知らないんだから。余命三ヶ月って言われて、もう一年も意識が戻らない人も、いるってさ……」
彼女は呆れているみたいだが、さすがに俺もしょっちゅう落ち込んでいるから。慣れた感じで、いつもよりちょっと優しい口調である。
「でも……」
「“でも”は無し。解かるでしょ？」
「……はい」
俺をしょんぼりと黙らせると、彼女は「じゃ、お休み」と言って黒い枠の内側に入っていく。
俺もがっくりは来ているが、今更彼女に反論(はんろん)しようとは思わないので、大人しく自分の黒い枠へと入った。

ふと、横を見れば赤い視界は良好で。

赤を歩く女性の黒が見える。その枠の間取りは家と同じ……何せ同じアパートだ。
女性の黒がふっ、とただの枠線になる。
その枠が枠を“脱ぎ”、落とす。
すると、女性の黒は一層そのボディラインをはっきりとさせ、尚且つ、間取りが同じあの部屋のあの位置は浴室なのであって、それはつま・・・・やばい、思春期怖い。

危うくそのまま枠の動きのみを頼りに芳醇（ほうじゅん）な若き想像力を活用するところであった。
ただ、バレたら“死”以外見えないので、やめ。
大人しく目を閉じることにする。

目を閉じれば、そこは完全で、妥協の無い、絶対の黒。

一呼吸して目を開ける。

そこは、暗がり。夜の黒。ただし、甘い黒。

光は完全に無い、なんてなく。月の光にしろ、物に若干にある光にしろ、今の世界に完全な黒なんてありはしない。
西側の窓を隠す、濃い水色のカーテンを眺める。
視線を戻せば、よく馴（なじ）染んだ布団。

布団に入り、ゆっくりと目を瞑（つむ）る。
赤い世界に行く過程ではない。夢の、優しい夢の世界に行く、過程。

あやふやな過程で思う。早く、早く。助けないと、助けたいんだ。

弥生、弥生――――弥生――――やよ……・・・・・・・

秋山良一はその日、いつものように眠りについた。
そう、目覚めることなく、眠り続ける人のことを想いながら。

そして、彼は忘れていた。
そう、布団の横にある“朝を告げる役目”を持つ時計の存在を。

翌日。
ぼろぼろなアパートに木霊(こだま)した「オギャァァァァァ」という少年の断末魔(だんまつま)。
隣の部屋には、歯を磨(みが)いている清楚(せいそ)な少女。
冷めた視線を壁の向こうに送る。
「またやっているのね……」と、斉藤(さいとう)　要(かなめ)は呆れたように呟(つぶや)いた
――――――。

つづく。

黒のスフィンクス　（2）（後書き）

どうもです。読んでいただき、ありがたい限りです。

そして、眠い……。

また・・・・じか・・・・・い・・・・・あ・・・・・マ・・・・・・シ・・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3417m/

赤い世界　－ＫＩＮＧ　of　ＢＬＡＣＫ－

2010年10月10日15時28分発行